

metarubureika

山田太郎 = 焼肉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「罪と悪意は消えないもの…パンドラの箱が開く時、絶望と終末が始まる、

しかしながら、その箱には一握りの「希望」もあつた…」

「おーい、弘人、それ読んでて恥ずかしくないのかよ」

「……」（顔真っ赤）

「中二病が再発したのかな」（・▽・）ニヤニヤ

「野郎オブクラツシャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「この作品の成分は大方ボケと浪漫でお送りいたします

作者の趣味がクロックアップ!!
来れる奴だけついてこい!

目次

第一章「平和とは戦争のための準備期間」

第0話 ————— 1

第一話「(胸が) 大き過ぎる・・・修正
が必要だ・・・」 ————— 5

第二話「これとあれとは話が違う」

9

第三話「この仕事って、ブラックだわ

その1」 ————— 13

第四話「この仕事って、ブラックだわ

その2」 ————— 17

第五話「この仕事って、ブラックだわ

その3」 ————— 21

第六話「注文はでっかくて、黒光りして

いる武器ですか?」「いいえ、そんな武器、

注文してません」 ————— 24

第七話「逃走は必須スキル」 ————— 29

第一章 「平和とは戦争のための準備期間」 第0話

ある者は、大きなことを成し遂げるために力を与えて欲しいと神に求めたのに、謙虚さを学ぶようにと弱さを授かった。

ある者は、より偉大なことができるようにと健康を求めたのに、より良きことができるようにと病弱な体を与えられた。

ある者は、幸せになろうとして富を求めたのに、賢明であるようにと貧困を授かった。

ある者は、世の人々の称賛を得ようとして権力を求めたのに得意にならないようにと失敗を授かった。

求められたものは何一つとして与えられなかった。

周りからは火薬の臭い、肉の腐った臭いが漂っている、この匂いで嫌でも分かる、「戦場」だ。

吐きたくなくなるような臭いが漂っている中、周りにいる人間、いやに^{人の形をした化け物}んげんは人の持つことが出来ないような異形の武器を掲げ辺り一帯を火の海…いや『地獄』に変えながら仲間が化け物に食われていてもその仲間もろとも殺す 仲間がまた一人、二人、三人目と死んでいる中で一人の女は笑っていた、恐怖から来るものではなくこの状況を、戦いを楽しんでいる

「アハハハハハハハハハ！死んだ死んだ！また死んだ！いまので何人死んだ！1, 2, 3, 4, 5, 6, 7……アハハハハハハハ！いつばいいいっつばいい死んだアハハハハハ！」

そしてこの女の周りにも化け物が集まってきていた

「次は私が死ぬ番？でも残念！死ぬのはあなた達！」

次の刹那、化け物はズタズタの肉片へとへと成り果てていた、化け物をズタズタにした男を女は知っていた

「あく遅かったね○○○○痛く痛い!!死骸の脚で叩かないで!」

「早く武器を持って、そして立て、こちらの部隊は壊滅した、生き残ったのは俺たちだけだ」

女は武器を持ちながら

「だったらたら逃げていい?」

と半分冗談で男に聞くと

「逃げたら殺す、死んだらもう一回殺す」

「うわ、容赦な、冗談なのにどうして?」

「冗談いつている暇があったら一匹でも多く倒せ」

「へーイ」

しかしながら二人で勝てるほど敵も甘くは無い

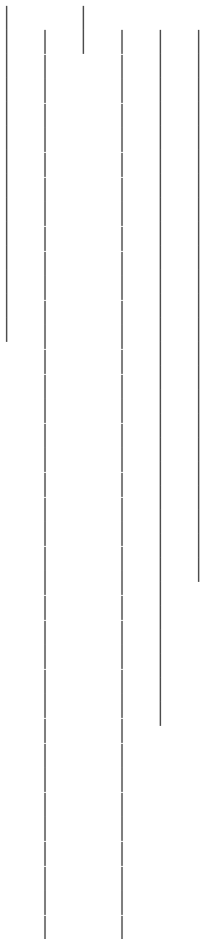
「ハア!後130匹い○○○○そっち後何匹」

「25匹・・・そしてこれで終わりッッッ!」

「はあ!はつや!だだったらこっち手伝つ……………がはつ!」

そこにいたのは、背中にハリネズミの針を全てミサイルに変えた装甲を持ち、手には掘削機、足は戦車の履帯のらしき物でらしき物でできたバケモノがそこにはいた

「???!
ツ、チツ！こんな時に
CクLラスSス
ひユフシロン！」



第一話「(胸が) 大き過ぎる・・・修正が必要だ・・・」

朝から頭に響き渡る忌々しい音『目覚まし時計』、その針は絶望へのカウントを続けていた

「(、0言0、*) <ヴェアアアアアアアアア！寝過ぎたあああああ！」

彼女の名前は夢未夢荘^{ゆめみむそう}、彼女の手にした目覚まし時計は『7』と『53』を指していた

「い、嫌だ、弘人とヒビキに「ゴジマフラッシュユ！」「ゴジマパンチ！」で爆☆散☆される！」

そんなこと考えながらうっかかり生卵を電子レンジに入れ、爆散！

たまごだった物」

「(、0言0、*) <ヴェアアアアアアアアア！」

そして夢荘はなけなしのお金でパン買い学校へとむかうことにした

夢荘は唸っていた、なぜ朝ごはんが食べれなかったのか・・・(主に自分のせ

い)

なぜ、帰ってきたテストが赤点だったのか……（これも自分のせい）
なぜ、お昼ご飯を忘れたのか……（どう考えてもお前のせい）

夢荘は考えた考えて考えて一つの答えを導き出した、「そうだお昼ご飯を誰かから恵んで貰おう」

しかしながら現実には残酷である、皆口をそろえて「ごめん今日はちよつと」
「皆には絶望したよ！ orz いや、まだまだ！ まだあの二人なら」

そして夢荘はその二人がいると思われる場所へむかった

屋上

夢荘は二人の男子学生の前で土下座をしていたかれこれ2分間も

「土下座とは……金持ちのボンボンが、底辺にいる私たちに、いったい何の用で」

「おいヒロト、その言い方はどうかと思うが……」

〜二分後〜

「何か、お昼ご飯を恵んで下さい……」

夢荘はある二人の男子学生の前でお願いをした

「あれ？夢荘今日も弁当わすれたんですかあwwwwwwww」

話しかけたのはヒビキ・タナカ、空手をやっているが反則ばかり取っている、あと名前は気にするな！

「ざまあwwww」

ラノベ読みながら笑っている男子学生は山先弘人やまさきひろと、至つて普通の主夫である

「お腹が空すぎてヤバいんです・・・何か食べ物・・・」

「0ーソンのメロンパンでいいか？」

「あ、ありがとうございます！」

「夢荘・・・お前金持ちのボンボンなのに・・・それでいいのかよ・・・」

そんな会話をしながら弘人が鞆からメロンパンを取り出した

「「あつ、」」

が、そのメロンパンは無惨にもペチャンコに潰れていた

「「……………」」

そこにヒビキの悪意はないが無慈悲な口撃を放つ

「だ、ダイジョーブだろ、こんなの夢荘の胸部装甲みたいに潰れているd……」

次の瞬間ヒビキの目の前にハルバードが振り下ろされた

「……………ブス」

第二話「これとあれとは話が違う」

「さて・・・今回で28回目・・・」

夢荘はヒビキにハルバードを向けながらゆっくりとゆっくりとだが確実に近づいてゆく、まるで相手に恐怖心を植え付けるように

「ま、待つてくれーいやー待つてくださいムソウサン、今のは言葉の

誤りと言いますk「ハイクを読め、カイシヤクしてやる」余計に怖い！」

次の瞬間、ヒビキの視界外からハルバードを振り下ろす

「しいいいねええええいいいいいいー！」

ヒビキはその一撃をバックステップで回避、しかし夢荘はそれをわかっていたかの如く

もう一振りのハルバードを取り出し攻撃したがそれすらもヒビキは回避したが、制服の

袖を切り裂いた

「（・兀・）チツ、外したか・・・だけど次は当てる」

「あ、あつづね・・・今の当たってたら死んでたぞー！」

しかし夢荘は当たり前だと言わんばかりにそれはそれは素晴らしい笑顔で

「貴様は、私（の胸）を侮辱した、それ以外に理由がある？」

「いや、さっきのは誤解と言うか・・・うっかり口がすつべたと言うか・・・ヒロト！ヘルプ！」

ヒビキは、ヒロトに助けを求めろが

「制服の袖は後で縫っておくから安心して逝ってこい、ヒビキ」

弘人は約五十m離れた安全圏から手を振っていた

「ヒロトオオオオオ！テメエエエエエ！後で

絶対的にブツ殺してやる！」

この後、ヒビキは制服を世紀末覇者のような服に改造されたらしい

およそ75年ほど前に突如として大量出現・・・いや、発生した金属生命体によって人類は成す術も無く蹂躪された。

そして、このまま成す術もなく蹂躪されるのかと誰もが頭を抱えていた時と同時期ある粒子が発見された。

その粒子の名前は「フォトン」

その粒子のエネルギー量は核エネルギーのおよそ十倍

そして金属生命体に対しての最強の攻撃手段でもあった・・・

同時期に設立した謎の対金属生命体殲滅企業〔ROSET〕

そして人類は金属生命体との全面戦争を開始した、最初に始まった戦争はおよそ五年間も長引いた。

その結果人類は初めて金属生命体に勝利した、だが、世界人口の四分の一と世界の主要都市の大半を失った。

人類はこの金属生命体を通称「コマンド」と呼ぶ



第三話 「この仕事って、ブラックだわ その1」

夢荘は布団から勢い良く起き上がると壁に掛けてある時計に目を向ける

「や、やたああああ！わ、私は・・・私は・・・遂に・・・遂に・・・時間にツ！勝つたああああ！」

その時計が指している時間は『5』『55』そう・・・夢荘は勝つたのだ（正直どうでもいい）、時間と言う学生にとって最大の敵に

珍しく早朝早く起きた夢荘は、残っている睡魔を追い出す為に散歩をしていた

「いや〜やつぱり早起きは気持ちいいね〜」

「おろ？夢荘珍しく早起きだな」

そんな独り言を呟きながら、散歩をしていると、後ろから弘人が話しかけてきた、しかし

「ん？あつ、弘人おはy・・・えっ」

しかし、その格好は誰がどう見ても何故かエプロン（ピンク色のひらひらしたやつ）である

「どうした夢荘？何か奇妙なものを見た様な顔だぞ」

「えっ？えっ？ひ、弘人？だよね？」

夢荘は恐る恐る聞いてみた、聞かなければならない

「えっ？弘人……だよね……」

「イグザクトリー、その通りだ、それ以上それ以下に何がある？」

「いや、ん？それよりも弘人、その担いでいる袋つて何？」

しかし注目するべき場所はそこではない、弘人が担いでいる何故かもごもごと動いている

袋である。

その袋はゴミが入っているとは思えない、なぜなら、それは人の形をしているからだ
「ん？これはニートだぞ、どこからどう見てもニートだろ」

「え？いや、どう見ても人が入った」「これはニートだ」アツ、ハイ」

そのまま弘人は袋を担いで何処かに去っていった、夢荘は周りを見渡してみた
早朝早くから出勤しているサラリーマン、OL

犬の散歩をしている老人

また、ある場所では姉らしき人物に追いかけている弟らしき人

もう一度言おう

姉らしき人物に追いかけられている弟らしき人物

その時夢荘は思った

「今のは見なかったことにしよう、うん、それがいい」

「ね、ねえ、ヒビキ、弘人、この依頼って、ど、どう、思う？」

夢荘はポケットからスマホを出してその依頼の載っているページを二人に見せた

「うーんと、どれどれ『新型兵装の試験運用者の募集ただし命の保証はできないため遺書を持参して下さい』．．．うわ、これ『ジンクス』社の依頼だ．．．なあヒロも「よし！行こう！今すぐ行こう」即決!?アイエエエエ!?即決!?即決、ナンデ!?!」

ここで一つ『ジンクス』社について補足を入れよう

『ジンクス』社はコマンドが発生する前の時代からあるネジから戦艦まで、何でもありの会社で周りの企業からは「この会社には金と時間を与えてはいけない」と恐れられているそして最初にフォトン粒子に目を付けた会社でもある。

そして何と言ってもこの会社の恐ろしいのは社員全員が変人技術大好きな集団で武器使用者の安全性が確保されていないのに使う奴がいると言う所だ。

つまり何が言いたいかと言うと……弘人は頭のおかしい人である

「ね、ねえ弘人やめよう、この依頼……私まだs「はい、ポチつと」アアアアアアア
弘人!?!お、おま、おま」

しかし弘人の顔は迷いのない顔で

「依頼は三日後だ!それじゃ、また明日!チャオ!」

第四話「この仕事って、ブラックだわ その2」

前回までのあらすじ

ヒ、夢『死にたくない……死にたくない……！』

弘「安心しろ……死ぬほど痛いだけだ」

説明終了！

突如として大量発生した金属生命体〔コマンド〕奴らは最初に発生したのは

2035年5月7日メイントップ湾にて発生。

艦砲射撃、航空爆撃、ミサイルなどの攻撃は奴らに対してかすり傷すら与えることが出来なかつた、いや、実際には奴らが常に展開している障壁（プライマルアーマーやGNフィールドみたいなもの）に阻まれ既存の兵器ではダメージを与えることが出来ない。

2036年1月13日メイントップ湾に奴らの巣らしき建造物が建造される。

この巢からは奴らの身体を構成するための核が大気中に拡散され、これにより世界にコマンドが発生し世界の主要都市に巢が建造されはじめた。

コマンドの基本的な体長は小型でも約4、5 mで、最大級でも約200 mクラスであり身体の構成は主に金属性の物体で戦車や装甲車、大型でイージス艦などを模倣している

更に奴らは意識の一部を共有している為に一度成功した作戦でも一時期は効果があるものの、おおよそ2週間で対策を取られる

そんな奴らを屠る集団がいる、その集団の名を ブレイバー 狩り人

しかしブレイバーの数はそれほど多くは無い。

ブレイバーになるためには試験などに合格しなければならぬがその中でもフォトン粒子に対する耐性が無ければ高濃度フォトンフィールド内での戦闘不可以前の問題で、フォトン粒子の逆流で身体が弾け飛ぶことになる「ANSから光が逆流する……!!」
ギヤアアアアツッ!」

しかしブレイバーになれたとしても最初に支給されるのは武器ではなくフォトンライブ（大きさはおよそ5 cm、幅1.5 cmのバッテリーさえあれば半永久的にフォトン粒子を生成することができ更にコマンドと同じような障壁を常に展開しダメージを最小限に抑えることができる）しか支給されない。

しかしフォトン粒子を纏わせた果物ナイフとフォトン粒子を纏わせていないミサイルとは与えることができるダメージが違う。

ミサイルでは障壁を破ることが出来ないがフォトン粒子を纏わせた果物ナイフであれば障壁ごとコマンドにダメージを与えることができるが、そもそも果物ナイフではまともなダメージを与えることが出来ない

武器を入手する方法は以下の方法がある

- ・お財布に余裕があるのならRSTから武器を購入する
 - ・ある程度の実力とお金があるならオーダーメイドによる入手
- そしてもう一つの方法は・・・企業への自身の売り込みである

08ーkt！ゲキハサレマシタ！

サイカソウカラ、コウネツゲンハンノウ！メインシャフトユウカイ！

硬質化粘着弾頭搭載型08ーktトツニユウマダカ！

ダメデス！ハンニユウグチガハソンシテイテ！

ジnkクス社内は阿鼻叫喚に包まれていた

「弘人・・・帰って「ダメです」「デスヨネー」

10時間前ジnkクス社

ジnkクス社内第13研究室にて二人の研究者が職員からちよるまかし持つて来た書類に目を向けていた

「これが今回の実験体か・・・」

一人はジャージに白衣を着た目にクマのできた女性研究者

「はい、何でも元最下層民らしくて・・・」

もう一人はスーツに白衣の男性研究者、名前は通称山田さん

「あの最下層民ねえ・・・まあどうでもいいや」

しかし素っ気ない反応とは裏腹にその目はまるで新しい玩具を渡された子供のようなものであつた

「主任・・・どうs「この仕事は第13が請け負うから準備を始めておけ」・・・了解しました。」

第五話 「この仕事って、ブラックだわ その3」

山先弘人の華麗なる（笑）一日はジョギングとゴミ出しから始まる

「ヤバイ！サラダ油がねエ！買いに行かねば……（使命感）あー!!!今日ゴミ出しの日じゃないか！」

そして、家に戻れば、朝の朝食を作る

「朝はやはり米だよなあ……何独り言をブツブツと……悲しいなあ……はああああああ……」

朝食を作り終えたら、二階でまだ寝てる同居人を起こしに上がる

「ゴオオオラアアア!!とつとと起きやがれゴミムシがッ！」ドドドドドドドドン！
へソソナニカツカカツカトオコツテイタラ、ケツトウチガアガルゾ

「テメエがそうさせているんだろぅがッッ！」

同居人を起こしたら、朝食を食べる

「クツソ！あんのゴミムシ！また起きなかつた！布団が干せないじゃあないか！クソッ！」ゴッ！

冷蔵庫へまあ、落ち着けよ

「ツツツツツツツツツツツツ！」バタバタバタゴロゴロ

そして朝食を済ませたら、隣りに住んでいるヒビキ・タナカを起こしに向かう

「よお、ヒビキ起きてるかー」ピンポーン

『ちよつと待て！いまあけrドンガラガツシャーン！イツ→タイ←アシガー！』

「ちよつと待つてろ、今開ける」つ合鍵

そこを開けると目の前に広がるゴミの山、その中で埋まっているヒビキ、それを見て頭を抱える弘人

「いやー、助かった！ありがとー！」

ゴミの山から救出されたヒビキ（ゴミの山は弘人が全て捨てた）は弘人の前で正座させられていた

「・・・今日・・・何の日か・・・覚えているよなあ・・・」

「HHHHH☆ナンノコトダカ、ニポンゴムズカシイナー」

「ふざけるな、今日は新型兵装の運用実験日だぞ、忘れたとか言わせんぞ」

「おこななの？」

「怒つてないよ」

「嘘だぞ、絶対怒っているぞ」「ギ酸をけつにぶち込むぞ」やめてください死んでしまいま

す」

「よお、夢荘、意外だなお前がこんなに早く着いているなんて」

「ふっ、なめるなよ、こちとらドキドキが止まらなくて（生命の危機的な意味で）眠りが浅かったのよ」

「やはりか、自分もドキドキ（興奮的な意味で）が止まらなくてな」

2 時間後、ジンクス社メインロンビーにて合流した夢荘達だが・・・

「じゃあ、まずは先にあの液体に使っててください」

夢荘達は謎の発光しているドロドロとした液体が入ったカプセル状の容器に入れた

「すみません、あの液体に浸かる意味って何かあったんですか」

ヒビキが職員に聞くと

「新型のシステムを搭載した1体多を想定したマルチフォームウエポンの試作武装なのでそれに対応した体調に調整するための液体・・・らしいです」（スタイリッシュ人体改造）

「ア、ハイ」

第六話 「注文はでつかくて、黒光りしている武器ですか？」 「いいえ、そんな武器、注文してません」

謎の発光している液体に入れられた夢莊達はジंकウス社研究区にある地下130層にある「特殊武装開発部門（仮）」とネームプレートが付けられた場所へ案内された。

「ようこそ、君たちだよ、依頼を受けたのは」

部屋に入つてすぐに表れたのは、特徴の無いのが特徴の男性だった、少ない特徴を挙げるとしたら所々に白髪が混じっている髪と、ヒビの入った眼鏡と、クタクタになって薄汚れた白衣ぐらしいしかない

「はいそうですが、えっと、貴方は」

弘人が男性に聞くと

「そっか！ はー、良かったー間違えてたらどうしようかと思つてたよ。ああ、そうか、僕の名前は山田^{やまだとしお}寿尾、一応はこの研究員なんだけど……まあ、今これは関係ないからいいや。おっと、そろそろ実験開始時間だね、多分そろそろ主任が来るとおm」

次の瞬間、ドアが蝶番の方から開けられ、山田寿尾（34歳）独身に対して理不尽な暴力が襲う

「だツシヤラアアアア!」

ドアへベンジャミンツ!

「ジャスミンツ!」

「はっはっはっはっは! どうだね! 山田くん、このでつかくて黒光りする新型の破城槌
パイルバンカーの威力は」

「……主任……」

「ん? 何かね山田くん?」

「入室するならいい加減に普通に入ってください! お願いしますよ! そのドア毎回直す
の僕なんですよ!」

「はっはっは、山田くん、閃きにはアクションが必要なのだよ、解るかい?」

「解かりませんし、解りたくもありませんよ! 大体貴女のせいで僕の給料からその分天
引きされているんですよ!」

「ふむ、そうか、それよりもこのパイルバンカーはどうだね!? このでつかくて、黒光りし
ていて、ぶつといこのフォルム……惚れ惚れするねエ……/ /これを作つた11
4514研究会の皆には感謝だな」ハアハアハアハア

「あんたつて人は人の話を聞かないのか!」

「あの、実験は……」

「大体貴女はくくく」グチグチ

「私にも、私なりの行動理念があつてだなくくく」ベラベラ

「あの・・・えつと・・・」

「ああ、ゴメンね実験だよ、主任！早く実験を始めましょう」

「ん？えーと君たちは・・・山田くんこの人達は「今回の被害sゴホンゴホン実験の参加者です」なるほど・・・さて、実験を始めようか」

夢荘達は130層にある実験用のドーム状の空間にやって来た

『さて、君たちにやってもらうのは、こちらで用意したマルチフォームカスタムウエポンシステムを搭載した1対多の武装です。簡単に説明すればその時々々の場面において、または使い手の得意な得物に最適な形で変形させると言うコンセプトの武器、なんだけどまだデータが集まっていないので手動型ですがデータが集まれば自動での変形が可能になる予定です。』

「そのための私達、つてわけね。でもそれなら弘人とヒビキはいらないんじゃない」

『いえ、人の脳波はそれぞれ違うので、その誤差を無くすために二人にもやって貰うんです。では先に夢未夢荘さんからお願います』

夢荘は渡されていたアタッシユケースから武装のパーツを取り出しカチャカチャと

組み立てていき、いつも自分が使っている槍と斧が合体したような武器斧槍ハルバードの形を作り出し、二、三、回その場で振り回した

「これ、結構汎用性が高いのね・・・強度性も十分にあるし」

『ええ、なんせその為のシステムを搭載した武器ですから。っと、主任!そろそろ始めますので『ああ、構わない』出現するの立体映像のコマンドですが、攻撃を食らうたびに軽い電流が流れますので、そこは注意してください。あと、このコマンドには武器による攻撃が通じたり、通常よりも速く動いたり装甲が堅かったりするのでそこも注意してください』

「おk、よく分かった、つまり弾かれても殴れということですね」

『いや、そうではないと・・・まあ、それはひとまずおいてまずはクラスアルファCSLαからクラスカイCSLxまでを段階順に出現させます。それでは、実験を開始します。』

ブザー音がドームの中に鳴り響く、それと同時に2〜3mの蟻を大きくした様なコマンドが出現する。その足には切れ味の鋭そうな刃物が付いている、実戦であんなものと遭遇したら遠距離以外ではひとたまりもないわね、と夢荘は頭で考えつつ斧槍を握りしめる

「準備はできているAre you ready? 私は出来ている」

その足は目の前の敵を倒すために、その槍は相手を突くために、その斧は相手を叩き

潰すために。

第七話「逃走は必須スキル」

「Are you ready? 私は出来ている」

その足は目の前の敵を倒すために、その槍は相手を突くために、その斧は相手を叩き潰すために。

「一撃でツツ！沈めツツツツ！」

その一撃はCSSLaクラスアルファの頭部に吸い込まれるように直撃……

「ありや？」

することはなくCSSLaは真横に高速移動していた

「は？え？はあああああああ!？」

る

【**／／**／**／**!?】

「うるせえ！その今わかんない言語で喋るな．．．！大人しく潰されてろ．．．！」

CSLaは抵抗を続ける、が抵抗虚しくその体を槍で貫通される

『そこまでです』

『次はCSLδクラスデルタになります。では．．．主任？はい、え．．．！はい！わかりました！』

「どうしたんですか？」

『どうやら、少し問題があつたようです、一旦戻つて来てください、実験は一旦中止にします、ちなみにヒビキくん達には既に伝えていきますから』

「はあ．．．？」

戻つてきた夢荘は山田から先程起きた問題の説明をされた

「え．．．？試作中の生物兵器を保管していたエリアが破壊されてその生物兵器が脱走した!？」

「はい．．．脱走した程度ならそのエリアのシャフトを閉めればいいのですが、シャフト自体が破壊されていて．．．えつと．．．」

「まあ、なんだつまり君たちにその脱走した生物兵器を捕獲とまでは言わないが殲滅して欲しい」

「主任！しかしそれは……」

「おや？山田くん、この子達はブレイバーだよ」しかしこれは社内ですら起きた騒動で「良いから黙つてろ」……はあ……もうわかりましたよ……主任の勝手にしてください。「うん、それで良い。一応は君たちはコマンドの殲滅以外に、犯罪者の逮捕や傭兵みたいなのが可能なの？。」

夢荘達は顔を見合わせ頷いた

「ならこれは依頼だ、報酬は山田くんの給料から抜いておこう」ちよ!?主任!」君は『主任の勝手にしてください。』と言ったじゃないか」

「それで、目標は一体どんなのですか？」

夢荘達はそれぞれ装備のチェックをしながら目標の説明を聞いていた

「こいつらは集団でワシヤワシヤと行動する。こいつら一体一体はそこまで強くは無いが、自爆したり、酸を吐いて来たりと色々とやって来る」

「自分、なんかそいつ知ってる気がする」

「弘人、それ知っているのか？」

「いや待てヒビキ、勘違いかもしれない。」

「いまうちで開発した対暴徒制圧用03—nを軍事用に改造した08—k t部隊を投入している。間もなく会敵する」

主任が指を刺した方を向くとモニターの中で四脚のロボット達が中央ホールから作業用ワイヤーで投下されている映像が映し出されていた

「会敵までカウント90!」

「さて、君たちも早く降下準備に取り掛かった方がいいだろう・・・ん?」

そう言いつつモニターを見ると08—k t部隊が半壊していた

「!!!」

「08—k t部隊! 損壊率87%!」

「後退させろ! 硬質化粘着弾頭搭載型08—k t投入まだか!」

「駄目です! 作業用ワイヤーにまわりついて・・・!」

「弘人・・・帰って「ダメです」「デスヨネー」」

夢荘達の戦闘が始まる
